<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>大熊信行とラスキン 「政治経済学」と「ポリティカル・エコノミー」</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>牧野 邦昭</td>
</tr>
<tr>
<td>役割</td>
<td>一橋大学社会科学研究資料センター年報 カレッジ・コア</td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>部門別発表文集</td>
</tr>
<tr>
<td>日付</td>
<td>2006-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>リンク</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/14109">http://doi.org/10.15057/14109</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
大熊信行とラスキン
——「政治経済学」と「ポリティカル・エコノミー」——

Nobuyuki Ohkuma and John Ruskin
——“Seiji Keizaigaku” and “Political Economy”——

牧野 邦昭

MAKINO Kuniaki

はじめに

大熊信行（1893-1977）は「配分原理」を戦時期の「政治経済学」、「戦後の「生命再生産の原理」を含むで知られる経済学者であり、評論家としても昭和初期の文芸・映画評論、戦時期の統制経済論の「イデオローグ」としての活動、戦後の自省・戦争責任論・主婦論など、様々な分野で活躍したことで知られている。こうした多岐に渡る思想を統一的に理解することは難しく、経済学者としての大熊を中心にした研究においても、大熊が生涯を通じて重視した「配分原理」と「生命再生産の原理」がどのように結びつくのか、なぜ大熊が戦時期に既存の経済学を批判して「政治経済学」を提唱したのかを必ずしも十分に説明するには至っていない。2)

しかし、大熊の思想のいわば「原点」を考えることで大熊の多岐に渡る思想をある程度関連付けて考えることができるとと思われる。大熊は河上肇のラスキン研究を読んだことを契機として経済学研究を志し、東京高商専攻部の福田徳三ゼミに入る際の面接でラスキンの研究を希望し、卒業論文は「社会思想家としてのカーライル、ラスキンおよびモリス」であった。そして大熊の初の著書はこの卒業論文を改稿した『社会思想家としてのラスキンとモリス』である。したがって、本論文では、初期の大熊に大きな影響を与えたラスキンの社会思想を検討し、それを基準としてで多岐な大熊の思想を理解することを試みる。特にラスキンは独自の「ポリティカル・エコノミー」論を展開しており、大熊も戦時に独自の「政治経済学」を提唱していることから、両者の関係を中心に見ていくこととする。大熊の思想展歴をめぐっては、鶴見俊輔らによってその「転向」が論じられたこともあるが3)、大熊によるラスキン評価、というよりもラスキンの思想の中でどの部分を評価するかはかなり変化しており、こうした変化を見ることで大熊の思想の変化を考察できると考えられる。したがって本論文はラスキンの思想から見て、大熊の思想を統一的に理解しようとする一つの試論である。また大熊が生涯にわたって重視した「配分原理」には、議論の上で必要な場合に限り取り上げることにしたい。

1) 大熊信行に関する研究は比較的多いが、大熊とラスキンとの関係を中心に論じたものとしては池田元『大熊信行の社会思想と配分原理——ラスキンとモリスの世界』大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』論創社、2004年所収、田中秀臣『戦前日本の生活経済学——ラスキンの伝統と大熊信行』『季刊家計経済研究』第45号、2000年、がある。本論文はこれらの論文よりも広く大熊のラスキンからの影響を認め、大熊は生涯貫してラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論に依拠していたのであり、「配分原理」「政治経済学」「生命再生産の原理」などはそのバリエーションとみなさると考えている。

2) 鶴見俊輔『翼賛運動の学問論』思想の科学研究会編『共同研究 転向（中）』1960年所収。
1 ラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論

英語の“political economy”を「政治経済学」と訳すことの是非をめぐって、日本ではかつて山田雄三と早坂忠との間で論争があったが①。現在では“political economy”という言葉は通常「経済学」と訳されることがほとんどである。ただし、後述のようにラスキンは既存の経済（学）に代わりうる経済（学）を“political economy”という言葉で述べている。そのため現在でもラスキンの経済観を論じる際には“political economy”は日本語では「経済学」ではなく「ポリティカル・エコノミー」と表記されることが多い②。そして大熊はラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論から日本の「政治経済学」を体系化しようとしていることを明言している③。この章では、大熊が自身の「政治経済学」の多を依拠したラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論を概観したい。なお、筆者の能力の限界もあり、ラスキンの芸術論と「ポリティカル・エコノミー」論との関係についてはごく簡単に述べるに止めさせていただく。

美術評論家であったラスキンが経済学に関心を抱くようになった原因としては、ラスキンの『ヴェニスの石』The Stone of Venice (1851-53)の「それぞれの国の芸術は、その国の社会的、政治的な美德を説明するものである…それぞれの国の芸術は…その国の人々的日常生活を正確に説明するものである」④という記述に見られるように、芸術と社会的条件が対応するというラスキンの芸術観が挙げられる。「ポリティカル・エコノミー」論が本格的に行展開されるのは1857年の講演であり、これは後に『芸術経済論』The Political Economy of Art (のち Joy for Ever に改題）として出版される。ラスキンは経済（economy）という言葉をギリシア語の語源を踏まえて「一家の経営で至一家の切り盛り」「金銭、時間、その他どのようなものでも、これをできる限り有利に消費または節約する事」⑤を意味するものとして用いている。つまり経済とは、

① 同論争のまとめとしては、美濃口武雄「エコノミックスとポリティカル・エコノミー 一山田・早坂論争をめぐって一」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第7号、1987年、が有益である。
② 例えば飯塚一郎訳「この最後の者にも」（五島茂編『世界の名著41 ラスキン モリス』中央公論社、1971年所収）では注釈で「ポリティカル・エコノミー」は一般的には「経済学」と訳すべきであろうが、ラスキンのときはいわゆる古典学派の流れをくむ人々の概念とは異なる意味をもっている。」（55ページ）として原語（political economy）は仮名書き（ポリティカル・エコノミー）で表されている。近年のラスキン研究における「ポリティカル・エコノミー」表記の例として、木村竜太「ジョン・ラスキン 一芸術から「ポリティカル・エコノミー」へ一「文化史学」第50号、2003年。同論文の注釈でも「ラスキンが経済学批判を行い、商業経済学とより人間的、政治的要素を含むであろう「ポリティカル・エコノミー」を意識的に分けていくことから、本稿ではラスキンの理論を論ずる時には「ポリティカル・エコノミー」という語を使用する。（291ページ）とされている。なお、ラスキンが用いる“political economy”という用語を無理に日本語に訳そうとすれば、場合によっては「国家の経済」「政治経済学」と訳し分ける必要がある。
③ 「われわれの生命的な課題は wählen日本の政治経済学 Political Economy の体系化をもって他にあるのではない。いまさらラスキンを通過しようとするとわれわれの企てがこの窮極目的に対して遠ざかるのみならず無効であるといふならば、われわれは意図をもってまで求めてあるのである。」「ラスキンの職分経済学（上）」「研究論集」（高岡高等商業学校）第11巻第4号、1939年、59ページ。
このような「切り盛り」のための「労働管理の技術」である。ラスキンは生（life）そのものを、生産する財としての「有用財」と、生の対象物（快楽を与える様々な材料を多様に生産する寄与のもの）を生産する財の二つに分け、この二つが存在してこそ家庭経済（household economy）や国家の経済（political economy）は健全なものとなると主張する。特に国家の中で国民の労働が上手に管理されれば国家の全人口によい食物と気持ちのよい住居だけでなくよい教育や「真の富」たる美術品を供給しうる。ラスキンによれば、労働の管理調節を行う国家の権力の原則は「友愛すなわち同胞」の原則と父権政治（バターニズム）であり、父権政治の保護の下での友愛、同胞愛により人々が結びついているという家族的な存在であることが健全な国家組織のあり方となる。

国民は社会的知識が発展するに従い、政治を単に司法的なものだけにとどめず更に父権的なものにしようと努力するようになる。「つまりわれわれの職業において命令したり、愚行からわれわれを守ったり、われわれの困難な状況を見舞ってくれそのような法律と権力とを打ち立てようと努力するようになる。」こうした新しい政治の下では、兵士が戦闘のための訓練を受けるのと同様に国民は平和事業のための訓練を受ける。「したがって新しい政治は剣を持った兵士だけでなく、鍛を持ち兵士をもたなければならない。そして紅の血で銅色になっている鋼製の名誉十字章を授与するよりも、もっと誇らしきに、収穫の輝きで燃焼としている黄金の産業十字章を一般に授与する様にならなければならない。」ラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論では職業に就く一般の国民も兵士と同等に訓練され服従すべき物として扱われる。そしていうば「産業戦士」としての国民には高いモラルが要求され、そのモラルに応じ形で保護が与えられることになる。

…私はみなさんに次の一つの真理を今後考慮することを望んでいる。それは、あらゆる人間の進歩や能力の根拠に訓練と干涉とがあるということである。「放任（“Let-alone”）」主義は人間のに関してあらゆる事に関しては、死の原則である。もちろん人が自分の土地を放っておけば、仲間を放っておくならば、自分の魂を放っておくならば、その結果はその人に取ってまったく壊壊である。これとは反対に、人間の生涯はそれが健全な生活である限り、不段の耕作と剪定、叱責と援助、監督と処罰との生涯でなければならない。そのため、国民の堕落を防ぐことができると考える訣鉄は、まさに国民の行動に対する抑制と干涉との原理の領域にのみ存在する。私は大衆には政府に対して教育を要求する権利があると信じているが、ただしこれは国民が彼らの政府に対する服従の義務を認めつつのことである。私は大衆には統治者に対して職業を要求する権利があると信じているが、それは国民が自分たちの労働の指導訓練に関して統治者に服従からることである。まず国民が統治者に対して、自分たちのくだらない気まぐれを抑え、自分たちの大気ない行動を指導するだけの父性的権能を与えることによって初めて、国民の弱足は取り除かなければならない、国民の弱者はすべて保護されなければならないとして国民から要求し得るのである。こうすることで初めて国民のあらゆる悲痛、あらゆる窮乏、あらゆる危険に対して、父の手は差し延べられ、父の幅はかかげられる事になるのである。


\[^{a}~A~Joy~for~Ever,~p.~17.~(『芸術経済論』31~ページ)\]

\[^{b}~ibid.,~pp.~17–18.~(同上,~31–32~ページ)\]
ラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論として最も有名な著書は『この最後の者にも』Unto This Last（1862）である。ラスキンはこの中でリカードやJ. S. ミルなどのイギリス古典派経済学を一括して商業経済学（mercantile economy）と呼び、これらは他者の労働に対する法律的・道理的請求権や支配力を手中にすることを目標としており、金持ちを生み出すがそれと同量の貧乏や債務を生み出すものであって必ずしも国家（state）の実際の財産ないし福祉の増大を意味しないものであると批判する。そしてそれに代わる真の経済学として「ポリティカル・エコノミー」political economy（the economy of a state, or of citizens）を唱えている。

ラスキンは『ポリティカル・エコノミー』を、「有用品もしくは快楽を、最も適切な時期と場所で生産し、保存し、分配すること」と定義している。その具体的内容として、農夫がちょうどよい時期に草を刈ること、船大工が堅牢な木材に十分に確にボルト打ち込むこと、建築工がよく練った煉瓦でよい煉瓦を積むこと、主婦が室間の家具を大切にし台所の潤を慎むことなどの例を挙げ、これらはみな正しい究極の意味において「ポリティカル・エコノミー」を営むものであり、たえず自分たちの属する国民（nation）の富と福祉を増大させているものであるとしている。そして最も適切な時期、場所で生産する方法として、ラスキンはやはりプラトン的な職能国家一優れた指導者が優れた知識と賢明な意志に従って下級の者を支配させ、指導させ、必要に応じて圧伏させる一を唱えている。

『この最後の者にも』の最後でラスキンは、物の価値は「生に対して役立つ」ことにあることを強調する。この視点から労働を区別するならば、プラスの労働とは生を生ずるようなものであり、マイナスの労働とは死を生ずるようなものである。したがって最もプラスの労働とは子供を生み育てること、最もマイナスの労働は殺人なること。そこから、「財の再生成」より「生の再生産」が重視されることになる。そして消費は生の再生産のために行われるものなので、消費こそが富の内容を表すとラスキンは主張する。そこから生の再生産を行う場所である家庭が重要であるとする結論が導かれる。

活動的な国家にはつねに二種の真の生産が存在することになる。一つは種子の生産であり、一つは食物の生産である。つまり一つは地のための生産であり、一つは口のための生産である。…地のための生産は、収穫という未来の希望を伴ってはじめて有用となるのはあるから、すべての本質的な生産は口のためであり、最後は口によって計量されるものなのである。したがって…消費というのは生産の極致であり、一国民の富というのは消費いかんによってのみ評価される。

ラスキンは『この最後の者にも』の結論部分において、『芸術経済論』では必ずしも明確に現れていなかった一芸術は生のために存在するものであるが一「生こそが富」であるという主張を強調する。

— 12 —

(32) 飯塚一郎訳『この最後の者にも』『世界の名著 46 ラスキン モリス』中央公論社, 1971年, 80ページ
(33) 同上, 112ページ
(34) 同上, 151-154ページ
(35) 同上, 140-141ページ
わたくしはこの一連の序説を終わるにあたって、つきの重大な一事をはっきりと述べておきたいと思う。つまり、生以外に富は存在しない。生というのは、その中に愛の力、歓喜の力、愛美の力すべてを包含するものである。もっとも富裕な国というのは最大多数の高潔にして幸福な人間を養う国、最も富裕な人というのは自分自身の生の機能を極限まで完成させ、その人格と所有物の両方によって、他人に生の上にも最も広く役立つ影響力をもっている人をいうのである。

まとめれば、ラスキンの「ボリティカル・エコノミー」論は、統治者が労働を管理して「適材適所」に配分し、そして国民による「適切な消費」が行われることで社会は富を生のために有益に使用することができ、最大多数の幸福な人間を育む理想的な国家を建設することができる、とするものであった。ただ、「適切に労働を配分する」「生のために富を有益に使用する」ための基準を客観的に示すことができるかどうかについては、ラスキンは明らかにしていない。

ラスキンはこの後の「ムネラ・ブレリス」Munera Pulveris (1872) でも「ボリティカル・エコノミー」論を展開しているが、同書でラスキンは1851年にウェネツィアを訪問した際の体験を記している。ヴェネツィアの聖ロコ講堂のティントレットの貴重な天井画がほろほどになって天井の穴からふら下がっているのに対して、バリでは石版画が需要に応じて大量に生産され商店で売られている。一見すればウェネツィアよりもバリの方が豊かに見えるが、実はティントレットの絵画を有するヴェネツィアの方が豊かであるとするラスキンの批判は、ラスキンの「ボリティカル・エコノミー」論が資本主義を批判しほぼを超えるとする意図から作られたことを示している。

2 柴田節行のラスキン評価

(1) 『社会思想家としてのラスキンとモリス』（1927年）

大槻は河上肇のラスキン評価を契機として経済学を学ぶことを決意したが、河上のラスキン評価は、社会改革を目指す経済学の二大潮流として社会主義の経済学と人道主義の経済学があり、前者の代表にはマルクス、後者の方にはラスキンがいるとして、人心改造にその評価の重点を置くのである。大槻はこうした楽観的な河上の評価とは異なり、少なくとも大学卒業時にはラスキンの「ボリティカル・エコノミー」論には懐疑的であった。大槻はラスキンの『この最後の者にも』や『ムネラ・ブレリス』は「果して経済学の書と称すべきや否や」。

同上，144ページ
人をして疑念を挟むしむ余地を残すものである。[56] とし、政治思想についても「プラトン流の政治思想を経とし基督教的共同主義を締とする」ものであって「その論調また必ずしもラスキンを須たねばならぬものとも思われない。[57] としてむしろ美術批評家としてのラスキンを評価している。またラスキンが重視した国民の道德的教養についてもその現実妥当性については否定的であった。卒業論文にいくつかのラスキンに関する論文を加えて刊行された大熊の処女作『社会思想家としてのラスキンとモリス』には以下のような冷静な記述が見られる。

ラスキンの有する国民経済の理想は、彼自ら言ふ如く国民の道德的教義の諸条件を前提として、初めて可能なるものであり、之を前提とせずしては存在の余地なきものである……然るに彼の要求する「道德的訓練」が現在の人類一般の性情に向って直ちに可能なるや否やは全く別の問題として存在する。……抑え、一なる人間の性情が、他の人間によって加へられた訓練は或説教による、道徳的に全く変化し得ることが一般に存在する事実なるか、或は当初人間の認識には入らざる社会的諸条件が、倫理的性情を最初より規定するものなるかの問題は、ラスキンの脳裡に一度もひらめいたことはなかったやうに見える[60]。

大熊は続けて、マルクス的な歴史発展論からもラスキンの理想先行の社会観の非現実性を批判した。

歴史的発展の過程たる近代の経済生活の諸相及び各人相互の社会的関係に向って、絶対の正義と博愛との立場より批評を下し、且つ個人の道徳的責任を無限に拡大する所の「教義」を与へることが、彼の為し得る最大のものであつたのではなくか。歴史的事実たる社会的不正と害悪との関係を、絶対理想の立場から、社会の一定の時と各階級に於ける個人に負はしめる所の道徳的乃至宗教的見解は、それが或る一点より出発して次第に緻密に組織的となれる程、何となく無稽にして実際的ならざるものと成り行くことが、ラスキンの諸論文に於て最も著しく見られるという事は注意すべきである。（傍点ママ）

さらに大熊は同書の中でラスキンが晚年に建設を試み失敗した共同体である St. George's Guild（聖ジョージ組合）の顕著を詳しく紹介し、「若しこれを指してジョン・ラスキンのユートピアと名付け得るならば、このユートピアは史上数あるものの中で最も不鮮明な、最も退屈なもののが一つであろう。」「このユートピアの特質を一言にして捉ふならば、それは近世の政治及び経済思想史上の二つの理念、即ち自由と平等を共に否定する服従主義にあるとはなければならぬ。[59] として厳しい評価を与えている。

だが、大熊は同時に「聖ジョージ組合を以て必ずしも社会思想家ジョン・ラスキンの諸思想の極限と観する必要もない」として、以下のように述べている。

しかしギルド社会主義を通してウキリアム・モリスがいかに活きてゐるか、またウキリア

[56] 大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』1927年、論創社版（2004年）13ページ。以下『社会思想家としてのラスキンとモリス』の引用は全て論創社版による。
[57] 同上、15ページ。
[58] 『社会思想家としてのラスキンとモリス』100-101ページ。
[59] 同上、180-181ページ
大熊が主張したのは、たとえラスキンの社会観が非現実的であり実践活動が失敗であったとしても、その問題意識を現実の日本社会において見ていくことであった。言い換えれば、大熊は同時期の御本隆三らのようにラスキンの思想や理論を研究対象として扱おうとしたのではなく、ラスキンの思想を日本において実践していくことを目指したのである。『社会思想家としてのラスキンとモリス』において、ウィリアム・モリスが「モリス商会」や「社会主義者同盟」によって実践活動を行ったことが評価されているのは、こうした大熊の実践志向を示しているとも考えられる。

ただ、多様な内容を含むラスキンの思想の中でどこに注目していくかで、実際に社会に対しでどのような主張をもって臨んでいくのかは大きく異なるだろう。大熊は『マルクスのロビンソングロリオフ』（1929年）において「配分原理」を展開しているが、これもラスキンによる「政治による労働の適切な配分」「富の有益な使用」といった思想から離れるものではない。『社会思想家としてのラスキンとモリス』の中の「労働労働者の経済経済からの干渉」という節では既に配分原理が主張されている。また、大熊は昭和初期には短歌革新運動や文芸・映画評論に力を入れる歌人・評論家としてジャーナリズムで活躍した。無用の漢字を廃し口語体を用いることで短歌を生活の実感に近づけてこうとする主張や、小説や映画といった当時の大衆文化を極めて取り上げるその姿勢は、ラスキンの思想の中における「芸術と生活との不可分性」が反映されているとも見ることができる。そして目中戦争が勃発し、統制経済や生活合理化が実現していく中で、ラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論、特に国民を訓練し国家経済の適切な部分に適切な資源を配分していくバタナリズムと「生の再生産」を営む場である家庭経済がフレームアップされていく。

20同上、182-183ページ
21私見では、大熊の「配分原理」は、経済学とは希少な資源の用途選択の問題であるとするライオネル・ロビンズの定義と大差は無いと思われる。大熊は『資源配分の理論』（東洋経済新報社、1967年）の序において、ロビンズの「経済学の本質と意義」（1932年）と自らの「配分原理の」近似性に気づいたのは同書の校正中であったとしている。大熊はロビンズの定義における「用途選択」は配分決定の仮定をとらえたものに過ぎず、配分は経済の構造をとらえているとして区別を強調しているが、大熊が主張するほど違いがあるとは考えにくい。
なお、大熊は1929年に文部省在外研究員としてイギリスに留学した際、ロンドン・スカール・オブ・エコノミクス（LSE）でロビンズの講義およびセミナーを聴講している。（大熊信行『文学的回想』第三文明社、1977年所収「大熊信行年譜」参照）
大熊が経力戦体制に巻き込まれていた一つの原因としては、大熊の「配分原理」が挙げられるだろう。大熊は「配分原理」をあらゆる分野に応用していくことを試みるが、その一例が時間配分を示的に扱い、時間を消費する文学作品という商品の特殊性を分析するための「文学のための経済学」であった。さらに大熊は「配分原理」が現実の経済政策にも役立つものであること、計画経済の基礎となるべき法則であることを主張した。このように「配分原理」をあらゆる分野に拡張していこうとする試みが、やがて大熊を統制経済のイデオローグ的存在へと押し上げていくことになる。個人が自分の財や時間を配分するだけならば国家とは直接の関係はないが、国家が経力戦体制を意味して上から財や労働を配分する統制経済システムは、ラスキンの「ボリティカル・エコノミー」論と密接に関わってくるからである。

(2) 「ラスキンの職分経済学（上）（中）（下）」（1939年）
1939年、大熊は改めてラスキンを論文で取り上げている。

…かれ [ラスキン] はいふ、「政治経済学はたゞ有用快適な事物を最も適当な時と場所とにおいて生産し、保存し、分配するにある」と。いまもし、「最も適當な時と場所とにおいて」といふ右の一句を、「最も適當な時と場所とそして分量とにおいて」と書き改めるならば、問題の理解と展望とはまさに隔世的に一変する次第である。「分量」といふ二字の插入は国民的経済配分の課題を表象するからである。この配分の課題はこれを市場性における自然的調節にゆだねるべきか、政治行政的な意志的調節として遂行すべきかといふ一般問題こそ、政治経済学者があらゆる力を傾けて答へなければならない問題であり、この問題の内包する諸問題のなかに命を賭すべき問題のあることを感ぜざるをえないのである。

(傍点ママ)

資本主義的な退廃を打破し、「よりよき生」を送るためには、国家が資源の適切な分配を行い、生の再産生の場である家庭における合理化（適切な生活）を進めていけばよいという主張は、かつての大熊のラスキン評価と比べかなり楽観的なものとなっている。ラスキンがヴィクトリア朝のイギリスで繋り広げた資本主義批判は、資本主義、そして近代の超克を訴える当時の日本の風潮とうまく合致するものであった。大熊は同論文の最後で「近代経済学の財貨学的性格から脱却し、そして言葉の真の厳密な意味における『政治経済学』の理念を樹立したのはラスキンである」として高く評価し、ラスキンの思想を参考として新しい統一的な学問体系を作ることを主張する。

われわれは徳、政治、経済の諸問題を、いずれも一環性において、それぞれ全体的な問題の部分としてあつかふところの学問の立場をとることによってのみ、——科学の立場ではなくして学問の立場をとることによってのみ、ラスキンを正当に取扱ふことができるのである。ラスキンはしかしそのようない全体的な学問の立場をみづから樹立したのではない。

(21) 大熊信行『文学のための経済学』春潮社、1933年
(22) 大熊信行『経済本質論』同文館、1937年
(23) 大熊信行『ラスキンの職分経済学—Unto This Last の構造（上）』『研究論集』（高岡高等商業学校）第11巻第4号、1939年、86-87ページ
かれはたとその方向の示唆をあたへるのであり、そしてかれの論法はわれわれを導いて近代的な方法以前における事物の未分化の状態に、直感的な生活事態に、帰らしめるのである。

大熊は1937年の日中戦争勃発以降は文芸・映画評論を中止して経済学に専念し、「純粋経済学」を批判して政治による経済統制を主張するなど、積極的に総力戦体制に協力していく。しかし、かつて大熊が冷静に批判した、「ポリティカル・エコノミー」に必要な国民の「道徳的教養」が実現可能かどうかという問題は戦時期に入ると看過されがちになる。そして最終的にはラスキンが何のために芸術を重視したのか、という問題意識すら失われ、国家によるパテナリズムと生活合理化という面のみが前面に打ち出されていく結果となった。

3 大熊信行の「政治経済学」

以下では大熊の戦時期の著作である『政治経済学の問題』（日本評論社、1940年、以下『問題』）と、『国家科学への道』（東京堂、1941年、以下『道』）において大熊が主張した自国の「政治経済学」に見られるラスキンの影響を考察する。

（1）政治、国家について

大熊は政治の概念をプラトンとラスキンに依拠することを明言している。カール・シュミットによる「敵性」の区別を政治の概念とする考えに対しては否定的であった。「本書はむしろプラトン的な（一あるさは近代におけるかれの弟子であるラスキンのそれのやや）政治概念を、自己内部の中核とすることによって、総力政治の原理問題を提出しようとするものなのであって、政治の新概念を確立しようとする政治学的な野心のごくことは全くわれわれの関知しないところである。」（『問題』序25ページ）。

大熊は前述のように、ラスキンの政治・国家論を近代においてプラトンの職能国家論を復活させたものと考えていた。プラトンの国家論は国民を統治者、防衛者、生産者に区分し、それぞれに対応した従である知恵、勇気、節制を持つことで正義の徳が実現されることとする職能国家論（職分思想）である。そして大熊は、プラトンが行ったような職業の等級付けは否定するものの、「近代経済学の止揚におけるプラトン体系の復活」（『問題』232ページ）を訴える。そしてラスキンが『芸術経済論』で最初に唱え『この最後の者にも』第1章「栄誉の根源」で展開した「剣の兵士と鍬の兵士」の議論について高く評価している。

職分思想がわれわれの関心の一焦点となるのは、国家への直接奉仕者たる官吏・軍人の問題をなされて、産業生活の理念としてそれが登場する場合であり、この思想の近代における最初の、おそらく最大の爆発は、実際ラスキンの一論『栄誉の根源』であった。かれの経済論はまさしくプラトンの立場におけるイギリス古典経済学の批判だったのである。（『問題』234ページ）

[1] 大熊信行「ラスキンの職分経済学—Unto This Last の構造（下）」『研究論集』（高岡高等商業学校）第12巻第2号、1939年、118ページ

—17—
（2）経済について

大熊の「政治経済学」は資源分配の問題を重視するが、当時のほかの統制経済論者と異なる点は、労働力の配置問題を最も重視している点である。大熊はその根拠として第一次大戦におけるヨーロッパ各国の経験やナチスドイツの労働配置政策を挙げているものの、基本的には経済を「労働管理の技術」であるとしたラスキンの『芸術経済論』以降の議論を超えるものとは言い難い。

いはゆる人的資源の総体的な処理の問題は、国民活動の全体的な効果（または目的）をめざす合目的活動を分けて三つとする。第一に労働力の増加、第二に労働能力の維持増進、第三に労働力の諸部門への合理的配分・配置である。国家的立場における総労働力の処理の問題は、平時においても、戦時においても、本質的に異なるものではない。国民活動の全体的な規模における総力の配分・配置の問題を自覚することは、産業体系における労働力の配分・配置問題のみならず、兵備体系における兵力の配分・配置問題を包括し、そしてそれは両体系への国民的総力の配分および転換の問題を基礎とする。これは決して架空の論理ではない。すでに第一次欧州大戦における交戦諸国の国家政策的実践であり、実践的な思惟の方式であった。（『道』276-277ページ）

国家は総力戦体制において労働の管理を行う。一方、経済の本質は「生命の継続発展」であり、ゆえに生命の継続発展の場である「家」（家庭、国家）における生活が重視される。大熊は社会科学と自然科学を総合した国民科学としての「生活科学」の樹立を訴える。『政治経済学の問題』の副題は「生活原理と経済原理」であった。

経済の本質は生活の持続的秩序にあるといふその持続の意味は、今日から明日への持続であり、今年から明年への持続であると同時に、親の代から子の代への、子の代から孫の代への、生命の継続発展を意味するものでなければならないであろう。そこで考へなければ経済といふものの本質規定は不十分なのではないかと思われる。このような経済においては、秩序の成立の能動的な要因として、第一に理性の活動がなければならない。理性は経済全体の計画を樹立するであり、第二には意志の活動がなければならない。意志はこの計画を遂行するのである。かく意味の経済こそ、とりもなおさず「家の経済」であり、家の経済はこれを最も典型的なものに求めれば子孫への生命の持続といふ課題を中心とするのである。（『問題』14-15ページ、傍点ママ）

「生こそが富」であるとするラスキンの思想から見れば、このように生命再生産の場としての「家」を重視する主張は戦時体制下では一種の「抵抗」と見なせないもの。しかし「家」の重視は同時に前近代的な価値観にも通じることになる。大熊と激しく対立した難波田春夫が日本経済の基盤としたものは「家・郷土・国体」の三重構造であった。

（3）文化について

大熊が文化政策について述べる場合にはほぼ全面的にラスキンに依拠している。

おもに、あらゆる文化は、政治の理念を中心とする精神の一定状態を離れて存在するこ
とはできない。政治の理念は生活の理念だからである。文化はその根本的性格において道徳的である。道徳的見地からその本質を考察することのできない文化といふものはない。われわれはこの見解において、喜んでラスキンの方向に追随する。（『道』313 ページ）

特に同書に収録されている近衛新体制運動の時期に書かれた文章では、商業主義の否定により芸術における「利潤追求を一義とすることによって喪失されてゐた生活合理性の復帰」（『道』306 ページ）がもたらされることを歓迎している。『ヴェニスの石』などでラスキンが同時代の芸術を商業的なものとして批判したように、大熊も商業主義的な文化を超克するものとして新体制運動に期待していたことが窺える。

「かれ〔ラスキン〕にしたかへば、健全な美術は、個人的にもせよ、国民的にもせよ、健全な生活の表現である。そして一般国民が不健全であるとき、そのなかの一個人が健全であることはできない。であるから、健全な美術は、健全な時代のみが産み出すことのできるものである。その品位も、その真実性も、時代の精神にかかってゐる。」（『道』314 ページ）したがって、新しい文化を創造しようとする新体制の建設は国民精神の純化と高揚を離れて考えることは出来ない。そのためには国民精神の合が必要になる。

われわれにして、そのやうな意味における精神の合に到達したとするとならば、それこそは偉大なる国民的体験であり、この体験は、何よりもまつ底知れぬ歓喜をもって、国民の心情を貫くものでなければならないであろう。そのやうな歓喜の瞬間を通過することなしに、国民的創造の時代が復帰するであろうとは想像すべからざるところであり、新体制の根本問題は、わが日本国民の精神の状態を、文化創造者たるに適するものとして形成し得るやいやにかかってゐるものといふことはなければならない。（『道』320 ページ）

(4) 世界観について

大熊はマルクス主義と抵抗することの出来る思想体系の樹立を訴える。マルクス主義の思想体系について、大熊は「一面において堂々たる経済理論の体系であるが、しかしそ他面においては一定の世界観と歴史観をそなえており、一つの国家観をもち、しかも一つの方法論にもとづく科学論・芸術論があり、その立場から広く既成文化を批判し、芸術運動にすむものもある」（『道』122 ページ）という広大なものであると見なしていた。

大熊はマルクス主義に代える世界観を明確にしているわけではなく、ナチスのイデオローギー的存在であったゴットリ＝オットリリエンフェルトを評価しているかのような表現もある。しかし注意深く読んでもみると、新しい世界観の樹立を訴える輩においても「おもふに経済学にいはゆる経済の循環および発展といふ現象の基礎にあるものは、国民生活そのものの循環と発展であり、人間の生命の生産と、交替と、発展から離れて、物財の再生産も、流通も、あり得るものではない。」（『道』342-343 ページ）といったラスキンの思想に基づく記述は多く見られ る。何よりも大熊がマルクス主義について「芸術論」を備えており、「芸術運動」に進む者もいるとしていることから考えれば、大熊が芸術論を含んだ新しい世界観を求めていたこと、端的に言えばマルクスに代えるものとしてラスキンを考えていたことがわかる。大熊は河上肇とは視点は異なるものの、やはりマルクスとラスキンを二つの広大な世界観としてみていたといえるだろう。これは「ラスキンの職分経済学」における次の記述からも明らかである。
...学者はしばしばかれ [ラスク] の思想をマルクスのそれと対比することを欲する。およそカール・マルクスとラスクの対比ほど思想史上の比重において不釣合なものはないとおもわれるにもかかわらず、社会思想の真に究極的な本質においてマルクス主義の反対極に立つものを尋ねるならば、つひに求めてラスクに帰するほかはないといふようく感ぜしみるераがあるとおもわれる25)。

4 大熊信行の「政治経済学」の評価

大熊が樹立しようとした「政治経済学」は決して体系立ったものとはいえないと、『政治経済学の問題』『国家科学への道』は共に雑誌などに発表された論文や評論をまとめたものであり、中心的な体系が先に説明され、その応用が説かれるという形になっていたため、読む側にとってはくり返しが多く体系性・具体性に乏しいという印象を抱かざるを得ない。大熊の主張における体系性や具体性の乏しさは同時期の他の論者からも指摘されている。大熊のほか東映報、中山伊知郎、岸本誠二郎、杉本栄一が出席して『改造』昭和16年5月号に掲載された座談会「日本経済の基底―研究討議―」では、大熊は一国の経済財を(一)公共設備、(二)生産設備、(三)軍事的設備、(四)国民の生活設備と分けて合理的なバランスをとっていくことを主張した。しかし中山や杉本からそれをどのような基準で行っていくかを迫られると、大熊は「一国経済財の構造を意味した意味での資本内容といふかか問題になってきて、...その国を超えた関係の関係、関係関係全体、それから仮想敵国までこれに入れて、初めて、その判断の基準が揺れてくる」27)と述べるだけで、曖昧な発言に終始している。この座談会を評した右翼思想家の蓑田胸喜は、大熊の主張について「経済的で示唆に富むものでありはよいが、肝心の経済学的見地からの焦点が定まらず従って全体を客観性を保つて分析総合する論理が欠けてる。」28)と否定的な評価を下している。

大熊の主張の多くは「〜べき」という形で記述される。つまり資源、特に労働を適切に配分すべきである、生命の継続発展の場である家を重視すべきであるという主張は大熊の戦時期の評論でよく返し強調されている。こうした大熊の主張が、混乱を極め過度の消費抑制を強制していた現実の統制経済を批判する一面があったことは事実である。

問題は、大熊の「政治経済学」には「どのように行うか」という技術論が存在しないことである。一人の人間が自分自身の財や時間を配分することは容易である。しかし国家全体に財や労働を「適切に」配分していくためには、どのような基準で配分を行うかという技術論が絶対必要になり、技術論がなければただの形式論でしかない。大熊もそれには気付いており、山本勝氏による社会主義経済計算論争の研究を高く評価するが29)，結局「現実にどのように配分を行うか」という技術論は大熊の研究に見いただすことが困難である。そして技術論が存在しないままに「〜べき」という主張が可能な大熊の「政治経済学」は、ただあるべき姿を強調するだけで体系や具体性を欠いた主張のくり返しにならざるを得なかった。

さらに、実行の困難さや具体的問題を離れて経済のあるべき姿を説く主張は、あるべき姿が

25) 「ラスクencoderの職分経済学 (上)」58ページ
27) 「日本経済の基底」59ページ
28) 蓑田胸喜『国防哲学』東京堂、1941年、『蓑田胸喜全集』第6巻所収、103ページ
29) 大熊信行『昭和七年度経済学文献解題』『研究論集』(高岡高等商業学校) 第6巻第1号、1933年7月、130-132ページ
現実の経済と同一視されれば単なる現状肯定のためのイデオロギーになりやすい。商業主義的
文化を超えるものとして新体制運動を評価した大熊が、結果として戦時期のイデオロギー的
存在となったのは、大熊の「政治経済学」の形式論的な性質からして必然的なものであった。
もっとも、技術論が存在しないことで大熊だけを責めるのは酷だろう。そもそもラスキンの
「ポリティカル・エコノミー」論においても、どのような基準で富や労働を分配していくのかは
「適切に」行うしか示されていない。ラスキンが、統治者によって適材適所に労働を配分し、
国民による適切な消費が行われることで、富を社会のために有益に使用していくことで理
想的な国家を建設することができると主張したのは、資本主義の発展に伴う「美」の破壊への
鋭い批判として意味を持つものであった。しかし、社会のあるべき姿を示すことは、ラスキン
が聖ジョージ組合を作ろうとして失敗したことからもわかるように、理想的な社会が現実に建
設できることを意味するものではない。まして現実には「マイナスの労働」を生み出すもので
しかない戦争の中で、資本主義を超えてすべき新しい文化や世界観を作ろうとすれば、それは
「理想的な国家」の正反対のものを生み出すしかないだろう。

おわりに

大熊信行は1947年、大日本言論報国会理事であったことを理由として公職追放令を適用さ
れている。翌年、大熊は戦時中の自分の言動を自省した随筆「告白」において次のように述べ
ている。

社会主義や民主主義のみが、近代の社会思想を達成するのじゃない、国家主義もまた、お
なじ理想にむかってすむことができるので、という見解。それは時代の条件に強いられ
ることで生じた希望的観測に基づき、歴史的現実の手がなす主観化にすぎなかった。それ
はいままで変わっていない。そのような主観化を、最も無難に手ついたものだが、自分の
場合にはプラトン的国家観だったこと、そしてプラトンの血をひいたラスキンが自分の
すぐしろにおつったこと。それもいまではいやというほど変わっていない。…あのような現
実を政治的に主観化し、それをまた個人的にいろいろと主観化することで、思い思いに
そのなかに理性の要求をたきこむというのは、そうすればするほど、まちがいを大きく
するばかりだったのだ30)

ラスキンが理想とした国家は国民を訓練し、それぞれの職分に応じて国民に高いモラルを要
求し、その代わりに保護を与えるバタナリズムを特徴とするものであった。ラスキンの「ポ
リティカル・エコノミー」論の中にこうした国家主義に利用されやすい点があったのは確かで
ある。しかし、ラスキンが最も価値ある富としたのは人間の生であり、生の再生産こそがラ
スの価値を持つ労働であった。こうしたラスキンの理想を看過し、別の理想の立場から「国家
の経済」としての「ポリティカル・エコノミー」論＝「政治経済学」を展開して、資産や労働
を配分し国民精神の純化を求めるなら、それは結局のところ、どれほど個人の生を重視し人間
中心の経済学を構築することを訴えても、現実の個人の生を押しつぶす方向にしか働かないだ
ろう。

加えて、プラトン＝ラスキン的なバタナリズムに基づく「ポリティカル・エコノミー」は

30) 大熊信行「告白」1948年、『戦中戦後の精神史』論創社、1979年所収、408-409ページ
一元的な政治指導体制が確立されていて初めて可能となるものである。実際には陸軍・海軍・財界・官僚・政治家・宮中といった様々な主体により主導権争いが行われていたのが戦時期の日本の姿であった。大熊が統一的視点からの資源の配置を訴え続けたのはこうした多元主義的状況の克服を意図したものでもあったが、多元主義的状況の中で政治の一元化を主張すれば、結局は主導権争いに巻き込まれ、「敵一肉方」の対立というカルル・シュミットのいう「政治的なもの」に飲み込まれるというのを避けなかった。大熊は大日本言論報国会における内部対立を戦後何度となく語っているが、そうした対立が生じたのはラスキンの政治概念よりもカルル・シュミットの政治概念の方が妥当した当時の政治状況を考慮すれば当然のことだった。

戦後の大熊は国家の本質を悪であるとみなして国家的忠誠の拒否を主張し⑬、生命再生成の原理を経済の本質であるとする立場から家庭論や主婦論などを論じ続けた⑭。ただ、国家は「あらゆる新旧兵器とそれに即応する軍隊組織、また警察組織、また行刑組織」という物理力による「人間による人間の支配の組織」を⑮「強制と圧力の機関」であるがゆえに悪であるとする戦後の大熊の思想は確かに戦後思想に大きな反響を呼んだものではあるが、大熊の国家の機能に関する見方は戦前・戦中・戦後を通じて一貫しており、ただその評価のみが「善」から「悪」へと変わったとも表現できる。生の再生成から導かれる家庭の重視や、生活の中ににおける礼儀作法を再興しようとする最晩年の大熊の主張⑯も戦前、戦時中にも論じられてきたものである。大熊の多岐にわたる思想や活動は、大熊が生涯を通じてラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論をその基礎としていたと解釈することではじめて理解できるのではないかだろうか。ただ、最晩年まで評論活動を続けた大熊の思想が、ラスキンの「ポリティカル・エコノミー」論とそこから大熊が発見した「配分原理」を時代の変化に合わせて適応させていく以上のものを果たして含んでいたか否かの検討は、今後の課題としたい⑰。

[2005年12月 レフェリーの審査を経て掲載決定]
（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程）

⑬ 大熊信行・津久井隆雄『対談 戦争体験と戦争責任』『日本及日本人』1959年9月号、大熊信行『大日本言論報国会の異常性格』『文学』1961年8月号（『戦中戦後の精神史』所収）など。
⑭大熊信行『国家悪―人類に未来はあるか』論創社、1981年
⑮大熊信行『家庭論』潮文庫、1971年など
⑯『国家悪』234ページ
⑰『国家悪』300ページ
⑯大熊信行『日本民族改造論』『日本及日本人』1973年新春号―1974年新春号など
⑰細川隆元は大熊の多岐な分野における評論活動や戦時中の言論活動を取り上げて、大熊を「時流におおねて遊泳した人間無害の論客」「カメラマン学者」と酷評している（細川隆元『戦後日本をダメにした学者・文化人』山手書房、1977年、282ページ）。筆者はこうした評価は一面的に過ぎると考えられるが、大熊の主張が現在もなお読聴に値するものであるのか、それとも既に思想史の一例に過ぎないのかは、別に論じるべき事柄であろう。